

素材も大事です

出典

<http://www.asahi.com/health/tsuushinbo/TKY201204250278.html>

朝日新聞
THE ASAHI SHIMBUN DIGITAL

歯科金属アレルギー 唾液通じて血液に、全身に症状

春を迎え、汗ばむことが増えてきた。時計やアクセサリなど、金属が原因で赤みや発疹が出る金属アレルギーは、汗が原因となりやすい。しかし直接金属に触れていない部分にも、歯の詰め物などの金属が原因で全身に症状が出る場合もあり、注意が必要だ。

同じ金属に繰り返し触れると、汗や唾液（だえき）で溶け出した金属イオンが体内に入り込む。これがたんぱく質と結びつき、異物とみなされるとアレルギーの原因となる。

最近注目されているのが、歯科の治療で使う金属が原因となる「歯科金属アレルギー」だ。

「皮膚科などでいくら治療しても治らない場合や、症状が出る前に集中的に歯科治療を行った場合、歯科金属アレルギーが疑われます」と、東京医科歯科大臨床教授で、松村歯科医院（東京都）の松村光明院長は話す。

歯科用合金には、ニッケルやクロム、コバルトなど、アレルギーを起ししやすい金属が使われている。歯の詰め物などに含まれる金属が唾液を通じて血液に流れ込むと、全身に症状が出る。



金属に接している部分が赤く炎症する口内炎のほか、口の中や皮膚に編み目模様の白い斑点ができる扁平苔癬（へんぺいたいせん）、手のひらや足の裏にうみを持った水疱（すいほう）状の湿疹ができ、その後、ボロボロと皮がむける掌蹠膿疱症（しょうせきのうほうしょう）、手足に小さい水ぶくれが出来て、かゆみがある異汗性（いかんせい）湿疹などがある。

歯科金属アレルギーが疑われる場合、金属パッチテストを受ける。日本歯科大皮膚科学の山口全一教授によると、背中や腕の内側に、原因として疑われる約20種類の金属の試薬を含んだばんそうこうをはりつけ、そのまま2日間過ごす。ばんそうこうをはがし、1時間後、1日後、2日後、1週間後にそれぞれ、アレルギー反応が出ているかどうかを調べる。

この結果や症状をもとに、アレルギーの原因が歯科金属にあるかどうかを診断する。原因として強く疑われた場合、過去のカルテなどで該当する金属が使われているかどうかを確認する。

陽性反応が出た金属が含まれていた場合は、治療で使った金属を取り除き、代わりにセラミックやプラスチックなど、金属が含まれていない材料と交換する。インプラント（人工歯根）には、アレルギーを起こしにくいチタンが使われているため、症状が出る場合はほとんどないという。

金属アレルギー学会のウェブサイト (<http://www.metalallergy.jp/>) では、歯科金属アレルギーに関するQ&Aが掲載されている。

歯科金属アレルギー <http://health.yahoo.co.jp/katei/detail/ST250230/2/>

症状／診断

金属アレルギーによる口腔内疾患は、口内炎、口角炎、舌炎、口腔扁平苔癬（たいせん）などです。全身疾患としては、全身性接触皮膚炎、掌蹠膿疱症（しょうせきのうほうしょう）、扁平苔癬、偽アトピー性皮膚炎、顔面湿疹などです。こういった症状が出た場合、歯科や皮膚科などで対症療法を行いますが、その療法で治癒しなかったり、一時的に治癒しても再発を繰り返したりして他の原因が確定できない場合には、歯科金属アレルギーが疑われる可能性があります。一説には、手指に湿疹、皮膚炎を生じて対症療法でまったく治らなかったり、再発を繰り返す患者の60人に1人は歯科金属アレルギーの可能性があるという報告もあるそうです。

しかし、アレルギー症状があるからといってすぐに歯科金属アレルギーに結びつけるのではなく、原因アレルギーを検討し、検査で強い金属アレルギーがあって、その金属が口腔内にあるときで、あらゆる対症療



法が無効な時に、歯科医師と相談して歯科金属の除去もしくは他の材料への変更を検討することが望ましいと思います。

概要

歯科金属アレルギーとは、歯科金属が原因となって生じる接触アレルギーです。歯科領域で金属を使用することが非常に多いことはよく知られています。とくに日本は保険診療の範囲の制約などから、保険診療を中心に治療を行ってきた方のほとんどが口腔内に金属の修復物を装着されていると思います。

一般に金属は直接の抗体源ではありませんが、イオン化することで溶出し粘膜や皮膚のタンパクを変性させてしまい、その変性したタンパクが抗原となってアレルギーを生じさせるといわれています。歯科金属アレルギーは、花粉症のように I 型アレルギー（即時型アレルギー）、つまりアレルゲン（アレルギーの原因）に接触して短時間で症状が現れるタイプではなく、IV 型アレルギー（遅延型アレルギー）に属します。そのため金属に接触してから短時間にすぐ症状が出るというわけではなく、場合によっては数カ月もしくはそれ以上たってから症状が現れてくることもまれにあります。金属アレルギーを誘発させる金属イオンは、ニッケルイオン、コバルトイオン、クロムイオン、パラジウムイオン、金イオン、水銀イオンなどで、これらはその作用が強いといわれています。

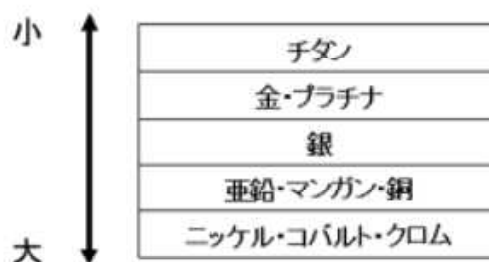
金属の種類によってアレルギーの起こりやすさが違います。チタンは最もアレルギーが起こりにくく、ファーストピアスに使用されます。このほか、白金（プラチナ）や金はアレルギーが起こりにくい金属ですが、金は純金（24 K）で使用されることは少なく、18 K（75%が金）には銀、銅、パラジウム、ニッケルが使用されていて、アレルギーを起こすことがあります。

出典

<http://www.yamate-clinic.com/pacchitest.html>



金属アレルギーの起こりやすさ



ニッケル

ニッケルは金属アレルギーが最も起こりやすい金属です。ステンレスに使われます。ジュエリーでは、金メッキジュエリーなどの下地として使用されます。

クロム

時計の皮バンド、革手袋、ハンドバック、革靴などの仕上げに用いられます。皮が皮膚に接する部分で汗の多い部分などに皮膚炎を起こすことがあります（足、手首など）。また、メッキにも使われます。ニッケルと同様にステンレスに使われます。

金

純金（24金、24K）はアレルギーの原因となることは少ないですが、混合金（イエローゴールド、ピンクゴールド、ホワイトゴールド）の場合、他の金属が混じっていて、純金に比べてアレルギーの可能性が高くなります。

成分/種類	金	銀	銅	ニッケル/パラジウム
純金(24K)	100%	-	-	-
イエローゴールド(18K)	75%	15%	10%	-
ピンクゴールド(18K)	75%	10%	15%	-
ホワイトゴールド(18K)	75%	15%	-	10%

亜鉛

真鍮や洋銀などの合金材料。亜鉛華と呼ばれる白色粉末は顔料、医薬品、化粧品などに含まれます。

お気軽にお尋ね下さい